HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	豪州流沿岸域管理を学ぶ
Author(s)	敷田, 麻実
Description	石川版朝刊10版25面掲載、金沢アンダンテ
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34966
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号26-2437
Type	article
File Information	1282.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

食あアンガンテ

題字は五木寛之氏

敷田 麻実

② 豪州流沿岸域管理を学ぶ

仕事の基礎、ここで

飛行機の高度がぐんぐん下がって、凪いだ海のむこうに赤茶色の地面が広がる。飛行機は豪州北部の小都市タウンズビルの空港に到着した。タラップを降りて滑走路に立つと、椰子の木や熱帯植物がまず目に入る。期待が高まる半面、心の中の不安はいやおうなしに膨らんだ。

オーストラリアで、私の大学院留学生活が始まったのは1990年1月だった。

県に勤め、最初は苦痛だった行政の仕事も、やってみればそれなりに面白く、興味深い経験ができたし、楽しいことも多かった。しかし5年ほどたつと、毎日の繰り返しが退屈になり、生来の好奇心が頭をもたげてきた。もう一度勉強をという気持ちが日増しに強くなった。

ちょうどその頃、「沿岸域管理」という言葉を知った。海の環境を保全しながら、海をうまく利用する、実用的な分野に思えた。沿岸域管理は、環境保全と海の利用を調和させるマジックワードだった。しかし日本の大学院で沿岸域管理を学べるところはなかったので、自然と海外での勉強を選択した。

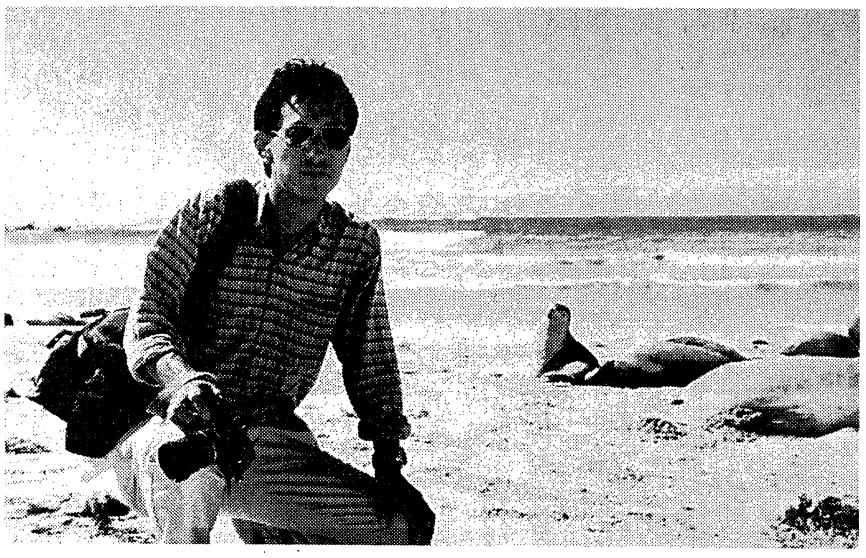
留学先は、アメリカにせず、わざわざオーストラリアを選んだ。幸い、時を同じくして、大学院で1年間学ぶ奨学金が得られた。しかし、県から留学許可をもらうことはそう簡単ではなかった。人事課からは、「地方公務員が1年間勝手に海外留学なんてまかりならん、やめてから行ってくれ」と言われた。

一応は検討するということになり、最後になって許可が出た。時代は大きく変わりつつあり、「地方自治体の国際化」の流れも味方してくれた。もちろん、この留学で得たものは大きかった。現在の仕事の基礎的な部分は、ほとんどこの留学中に学んだ。

勉強は予想以上に大変だったが、留学中に嬉しいことも多かった。中でも一番嬉しかったことは、沿岸域管理学の最後の講義で、私の発表を聞いていた豪州の学生が、終わった後ですたすたと私に歩み寄り、「その資料をコピーさせてくれ」と言ってきたことだった。講義室を出ると、豪州特有の澄んだ青空が広がっていた。日本晴れだ、と思った。

巡り合わせとは不思議なものだ。留学中の1990年、京都府の沿岸では貨物船が座礁し、油が海に流出していた。友人が送ってくれた新聞記事でそのことを知ったが、数年後に自分が重油流出事故の担当者になるとは夢想だにしなかった。

（金沢工業大教授）



留学先の豪州は環境に優しいエコツアーの先進国。アザラシの群れに近づける海岸もある＝豪・カンガルー島で（敷田さん提供）